

---

# ロゼとチェロキーの恋愛事情

竹野千代

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ロゼとチェロキーの恋愛事情

### 【Nコード】

N1107Z

### 【作者名】

竹野千代

### 【あらすじ】

僕らのバンドの「行方不明」だったギタリスト・デリクが帰ってきた。皆に黙って居なくなった事で彼を恨んでるヴォーカルのマツトに、デリクの愛は届くのか？ あるバンドのお話です。（BL要素薄いです）

今回は未完成な内からの見切り発車なので、不定期更新になりそうです。興味をもって頂けたら幸いです。

## 一：突然の訪問者

甘くて苦いその香りは、君の全身から迸る様に匂い立ってた。  
凄く強烈にさ。まるで君の性格そのままに。

何故だか、一目で惹かれてた。でも……無理だからさ。

香りを、せめて俺に頂戴。手に入れられない君の代わりに。

ねえ、ロゼ？

\*デリクがその人に対してどう格付けしてるのかなんて、一目瞭然だね。僕みたいに『かなり好きな感じ』の相手には、自分をデリクって呼ばせてる。『親しくはあるけどそれ以上にはならない感じ』の相手にはフレディ、初対面や眼中にない相手にはフレデリック、またはミスターって呼ばせてた。

特に気に入った相手には？ 『チエロキー』って呼ばせ方があるんだ。最上級のね。粹だよ、自分が吸ってるタバコの名前だつてさ。

だけど大きな欠点は、相手がデリクをそう呼んでくれない事。ね、マット？

本名、フレデリック・デイヴィス。職業・女たらし。……なんてね。僕等のバンドのれっきとしたギタリストさ。目下の所、行方不明中だけだね。

僕よりほら、チエロキーって呼ぶのを許されてたこの人に聞いた方がいいんじゃない？ 多分、一番仲が良かったんじゃないの？  
いつも一緒に居てたしね。

ほら、マット、答えてあげてよ。聞きたいんだって。デリクの事。

ええ、何？ 何で今頃？ まさか故人を偲ぶ、的な？

「あ、違うの？ 増刊号特別編？」「一番リクエストが多かったバンドの特集」？ そんで俺ら？……ああそう、お世辞でも嬉しいよ。あんがとさん。

……ってーな、何だよルーク。だってどっかで死んでるかも知んねえじゃん。っつーか大体な、俺に振る方が悪

ーあ？

……はあ？

……何これ。ドツキリ？

どっから仕組んでたー

ってうわ、ちよっ、待っ……………

\*ガターン、と座ってた椅子毎マットは遙か向こうに倒れて行った。言葉を途切れさせたマットの視線を辿った先で、僕がその状況を目に捉えられたのは一瞬。何かが風のように飛んで来て、マットを連れてった……。

何が起きたのか、瞬時には理解出来なかった。反射的に席を立って、見送った光景から今向こうに広がる光景を改めて目にして、ああそういう事、と僕は笑っちゃったんだ。同じ様に慌てて腰を上げてた記者さんにつこり笑って席へつく様に促して、僕は自分も椅子に腰掛けた。

風のように飛んで来た「誰か」が、勢いのままにマットの首に思いっきり抱き付いたんだ。目標を捉えたチーター並だったよね、今の速さ。なんて、僕は呑気に笑いながら記者さんに話し掛ける。

マットが言う様に、『仕込み』かと初めは思ったけど。だって、こんなタイミングで現れるなんてさ。

……でも、と僕はまだぶぶつと吹き出しながら思う。まあこの人

はいつも突然だったりするし。前からね。  
久し振りだけど、全然変わってないよね……。マットの事、ほん  
とに好きみたい。

……お帰り、デリク。

打ち付けた後頭部や背中や尻の痛み、のしかかる重み。首も絞  
められてるし。死ぬって俺。

目も回るし、まず訳が分からねえ。俺は何に襲われてんだかー  
まあ、残念な事にそれだけは判る。くすんだバナラの匂い。あいつ  
の体に染み付いた、嗅ぎ慣れたー元は俺のものだった匂い。

……それは判る。理由を知りたいのは、何で、の方だ。一年近く  
も所在不明で姿消しといて、何しに今頃帰って来やがった？！

ーって言うよか……

\*「ど、けーーーっ！！！」

マットが、ブチ切れた。思いつきり下から足でデリクの胸辺りを  
蹴り上げたみたい、デリク、ゲボツとか言ってる、大丈夫かな……。  
まあ、いわゆる自業自得ってやつだけだね。

マットも相当苦しかったみたいだね、首さすってデリク睨んでる  
し。倒れ方、半端なかったもんね。

この二人は何かいつでもこんな感じ、面白くてさ、わざと遠くで  
眺めてるんだみんな。トムとジェリーの的な感じ？ 愛があるよね。

……え、分かんない？ どっちにも、だよ。……えー、すごい分  
かりやすいのにー。デリクはあからさまだけどさ、マットもさ。嫌  
がりきれてない、許しちゃってる感じがさ。

本人は自覚ないからね、もしそんなの言ったりしたら、半殺しに

されちゃうからね。マツトってさ、そういつとこデリケートなの。  
……分かんないんだ？ 分かりやすいと思うんだけどね、ほんとに。まあ見てなよ、その内分かるよ。そしたら二人から目が離せなくなっちゃうけどね。  
僕等みたいに。

「感動の再会だぞ。胸に蹴り入れる奴どこにいる」

まさかの責める口調。俺は呆れて言葉もない。

ニヤツと笑って、野郎は続けた。

「どんだけ恥ずかしがり屋さんなんだお前は。変わってないな、ウブなところ……」

頬を触つての囁き、ときた。顔が近づく前に、俺はその手をばしと強く払い退けてやった。プレイボーイの技披露は女の前だけにしろ、って、……頭頂部を開いて直接脳みそにナイフでそう刻み入れてやりたい位だぜ。

苛立ちが限界に達しそうな前に、俺は立ち上がる。こいつには、怒りと憎しみしか覚えない。

勝手に居なくなっというて、勝手にまたふらっと現れて。どの面下げて帰って来れた、って話だ。

バンドにも影響した、俺だけじゃなくメンバーやスタッフ全員が困惑したし、迷惑掛けさせられた。誰が許すもんか。

無言を決めた俺の怒りに気付いたのか、奴は窺う様に小さく聞いてきた。

「あのさ……お前、何か怒ってる？」

何か怒ってる、って。そんなレベルかよ。

蔑みの冷たい視線を効かす俺に、分かった風に微笑んだ奴の顔が近付けられた。

「寂しかったのか……。悪かった、口ゼ。もうどこにも行かないか

ら

\*二人でぼそぼそ喋ってるから、何を言っただか分かんない。ただ、いつもみたいでデリクがマットを逆撫でした、らしい。

バキツ、とかすごい音がした。デリクが吹っ飛んだから、殴られたの確定だね。懲りないよねあの人。歯とか折れてなきやいいけど。そうして、見下ろして立ってたマットは倒れた椅子を立たせて戻して、そのまま出口に向かって行く様なのだ。

「あれ。帰っちゃうの、マット」

……声を掛けた僕に迄、とぼっちりの睨みがきた。湧き出る怒りを隠しもしない、見た目はクールビューティだけど中身は結構熱いその人は、さつさと身を翻して部屋から出て行ってしまった。

頬をさすりながら、”色男”デリクが僕等のテーブルにやって来た。記者さんが男だからか、初めましても飛ばして申し訳程度の会釈だけだ。

僕の右隣の椅子に腰掛けて。僕に対してはいつもそうしてた様に、デリクがぼんぼんと僕の頭に軽く手を置いてくる。大方一年振りの感触だ。

「久し振りだな。変わりないか？」

僕を見る目は、何故か決まって『可愛い弟に対する優しさ』全開だ。嫌じゃないから、気にもならないけど。むしろ、嬉しいけど。にこつと笑みを返して、僕は答えた。

「人生には変化がつきものだよ」

こういう僕の言い回しを、デリクはいたく気に入ってくれてる。くしゃくしゃと髪を乱された。

「正しくその通りだな。ーとここでこちらさんは？」

今頃、礼儀みたいに聞いてくる。一応の興味はあったんだね。

僕の紹介を聞いて、デリクは何だかよそゆきみたいに、愛想全開

の笑みで記者さんに言い出した。

「その特集ね、俺がまだ行方不明中って設定で進めて下さいね？俺が居るからって『バンド復活！』とはならないと思うから。俺は幽霊みたいなもんだと思って下さいね」

……その時の僕にはまだ、デリクのその言葉の意味がはっきりとは分かってなかったんだ。

一：突然の訪問者（後書き）

大好きなバンドのひとつ、FOBに捧げます。

## 二：波乱の幕開け？

くつそ。煙草吸いてえ。

もたれた背中からのけぞって、俺は空を仰ぐ。――苛々する。何で許せんだよルークは、あんな奴の事。

大事なバンドを途中で放ったらかして。何の用事か理由があったか知らねえが、あのまま活動を続けてりゃメジャーデビューも夢じゃなかったかも知れない。

ルークもドラムスのタイガーも俺も、口にはしないが密かに信じてた。俺達にとっては歴史的な、バンドの成功を。俺達の音楽が認められ、街のあちこちで曲が流れ、皆がそのフレーズを口ずさむ事を。

あいつの抜けた後を埋める為に他のギタリストを入れてみたが、どいつももしっくりこなかった。演奏は上手い、覚えもいい、練習熱心、人間的にもいい奴ばっかりだった。けど、「これ！！」って感じるもんがなかった。響くもんが、届くもんが、強く残るもんがなかったんだ。

……悔しいけど、あいつと合わさる心地よさを知ってるから。あいつとの協奏は――何て言うか、魂が同じなのかと思う位、見事に気持ち良くフィットした。

俺が望む所で、俺が望むとおりの弾き方をあいつはしてくれてた。タイミング・強弱・抑揚・距離感、全て口にはしないのに、あいつはまるで俺の心を読んだみたいにぴったり、俺がして欲しい演奏を、間の取り方をしてくれてた。

安心感、信頼感。あいつの演奏に合わせると、俺も声のノビやノリ方が格段に上がった様に思えてた。過信しちゃいけないけど、俺上手いかも？ っくにやける程度に。

普段どんな女たらしだろうが、俺に迄ちよっかい出すおかしな奴だろうが、「引き立て合う」相性の良さをいつも強く感じていた。

俺にとつての、唯一無二の存在。

「……だからこそ、黙って居なくなつた事が、俺には絶対に許せないのだ。」

ぼんぼん、と肩を叩く手。はっと垂れた頭を起こして、寝ていた事に俺は気付いた。

「やーっと起きた。風邪引くよ」

心配気なルークが、俺を覗き込む様にしゃがんでいた。首を動かして俺は辺りを見る、まだ暗くはなっていない。大して長い事寝てた訳じゃないらしい。

「ありがとな」

起こしてくれた礼を述べ、俺は立ち上がる。ルークも立って、俺達は並んで屋上から下のスタジオに戻った。

俺は口を開かなかつた。普段おしゃべりなルークも、今日は俺に何を言つていいもんやら考えているのか、何も喋らない。

俺が寝ていた間、ルークは奴と話したのだろうか。誰も知らない空白の期間について、奴は自分からルークに話したのだろうか。ルークの方から聞いたりしたのだろうか。

……知りたくなかない、聞きたくもない。どうせ言い訳だ。だから今、何も言わずに居てくれるルークが俺には有り難かつた。

じゃあな、とだけ告げてさっさとスタジオを後にしようとした俺に、ルークは確認する意味でか一言、尋ねてきた。

「デリクが帰つて来たの、僕からタイガーに言つていいかな？」

控え目な口調、……俺がルークに気を遣わせてる様なのだ、多分に無意識の不機嫌オーラを漂わせて。

反省の意味を込めて、俺はルークの柔らかな髪をくしゃくしゃと撫でて、自然な笑みを浮かべてみせた。

「頼めるか？ 助かるよ」

にこつ、と笑うルーク。彼の無自覚の癒し能力に、どれだけ俺は救われてきたか。あいつが消えて怒りに荒れてた時も、やる気をなくして何より大事な歌を手放しかけた時も。

感謝こそすれ、困らせる訳にはいかない。ルークが奴を受け入れる事を選択するなら、俺もそれに従う姿勢をみせないといけない。内心、はらわたは煮えくり返るけど。本心では、何があっても許せはしないけど。

形だけは。

\*「驚かないでね。デリクが帰って来たよ」

電話の向こうのタイガーは、当然驚いてた。長い間言葉が出てこなかったみたい、ようやく小さくそうか、とタイガーは返してきた。

「元気そう、だったか」

「うん。もうね、一年位のブランクなんのその。速攻マットに抱き付いて蹴り入れられるわ、殴り飛ばされるわ。なーんにも変わってないよ」

軽い僕の言い方も、まだ驚いてるのか冗談には取れないみたい、タイガーからの笑いは望めなかった。心配事はそれなんだろうね、気遣う様にひそめた声で、タイガーは聞いてきた。

「マットは……相当怒ってたんじゃないのか？」

「そう見えたねー。蹴りに殺意が溢れてたよ。一度、デリク抜きで話さないとな。デリクの方にも、事情を聞かないと。頑張ってるね、ボス。手伝えるところは手伝うからさ」

「おい、丸投げかよ。今日見てたお前が動くのが一番」

「えー、僕そんな大人の駆け引きとか分かんない。お父さん頑張ってるよー」

「……」

あ、黙っちゃった。ちょっとぶざけ過ぎたかな。反省して、僕は

なるだけ真面目な声になる様に気を付けて、低く言った。

「結構ね、マツトの怒り本格的。さすがの僕も、今日何も言えなかった。触らぬ神に何とやら、ってね。……とにかく、明日詳しく話すよ。スタジオじゃデリク来るかもだから、タイガーの家、行っていい?」

「ー返事なし。そこもまた僕調子に乗っちゃってた? とか考え直した時、タイガーが受話器に近過ぎる位置からの大声をかましてくれた。」

「まだるっこしい!! 今すぐ来い!!」

「……出ちゃった、体育会系ノリ。耳キーンってなっちゃってんですけど。キーンって。」

「……今から?」

「今すぐ、だ!!」

控えめに尋ねた僕の言葉を、わざわざ訂正して。苦笑して、はい、と僕はわざと軽く返してやって、向こうがまだ何か言う前に電話を切ってやった。長いからねカラまれると。

さて。まともな夕食を期待出来ない以上、こっちが買って行くしかないよね。

もう慣れっこになっている習慣みたいに、僕は近くのスーパーに向けて歩き出した。

## 二：波乱の幕開け？（後書き）

私が書く事に目覚めたのは、好きになったバンドのプロモ見て、「ア、アヤシイこの二人！」とかBLにも同時に目覚めてしまった時ですかねえ……。

なのでこれは私の「原点」なんです……

### 三：波乱の幕開け？

君の香りは、君の体からしか形成されない。当然の話だけだね。  
君の好きな煙草の匂い。

君の好きなワインの匂い。

俺が好きなその香りは、俺が真似して自分で身に付けても、君が放つそれとは全く違う。君から香るチェロキーの甘さが、ロゼワインの芳しさが、俺は好きだから。

視覚は何とか誤魔化せても、嗅覚と触覚に誤魔化しは出来ない。  
どちらも、君を求めている。渴望してる。

ーいどんなに、諦めようとしたって。

\*「肉はないのか、肉は」

人の作ったものに感謝する気もなく、そんな文句を言ってくれちゃうタイガーから、僕はお皿を取り上げた。

「あのねー。来る度に僕、アナタに美味しい手料理作ってあげてるんですけど。無償で。アナタの彼女でも家族でもないのに。まさか、タダでご飯が出来上がると思ってる訳じゃないよねえ？」

最後にかけて陰しく低くなった僕の声に気付いてくれて、タイガーは申し訳なさそうに体を小さくしようとした。

「……すまん。勝手な事を言った。作ってもらってる身でありながら。悪かった。掛かった金は払う、払うからーい美味しいから食わせてくれ」

反省するそばから、まるで反省してない台詞を口にしてる。大人のかせに裏のない真っ直ぐな事しか言えないタイガーに、そうして僕はすぐ折れてしまうのだ。

本当は大して怒ってはいないけど、からかうと面白いから、わざ

とにまだ不機嫌顔を続けてやる。タイガーは「多分、純粹に料理を食べたい気持ちで勝つたらしいタイガーは、おあずけを食らった飼い犬みたいな顔して僕を見上げてる。」

……負けまし、た。耐え切れず、ぷつと僕は吹き出してしまふ。遠ざけてた料理のお皿をタイガーのすぐ前に置いて戻して、笑いながら僕は言った。

「冗談だよ。言う程僕、料理するの嫌じゃないしさ。タイガーみたいに美味しそうに食べてくれるんなら、作り甲斐あるし」

言葉を裏付ける意味で、にっこりと子供みたいに無邪気な笑顔を浮かべてみせた。

「材料費払うとか言わないでね、感謝の気持ちをお金で返したりしないでね。そういう無粋なのは、僕嫌いだからさ。今度がつつといのお店でおごつてよね、高級中華とか。それで手を打ってあげる」

わがまま女子みたいな僕の言い方が何か、過去のタイガーの恋愛か何かを思い出させてもしちゃったのか、途端に真っ赤になって。見た目は坊主のいかつい大男だけど中身は乙女、のアメリカ代表タイガーは、分かりやすい位そうしてもじもじと背中を丸めて、モゴモゴと歯切れの悪い言葉で応じてきた。

「……承知した。絶対に近い内に、そうさせてもらう。お前はその優しいな、何だか照れるよなこういの……、いや、へっ変な意味じゃなくてだなっ」

「照れないでね、やりにくいから。早くこれ食べちゃってね？」

笑顔のままぱつさり斬つてあげて、僕は食べる事に専念出来る様にお皿をタイガーに寄せてあげた。妄想の中で僕を彼女に見立ててしまったらしいタイガーの、お手軽な甘い夢を砕いてあげる為に。

料理に箸を伸ばし出したタイガーを置いて、僕は自分の食べ終えたお皿を片付けに流しに立つ。こういう単純な事に舞い上がってしまふタイガーは、人として嫌いじゃない。

その場の空気に吞まれてお馬鹿な妄想をしてしまった自分を後で恥じるだけのまともな自我があるし、そうやってした反省を、多分

後でわざわざこっちに教えてくれちゃうんだろ。全部、目に見える。

戻ったら、まずデリクの話題を振ってあげよう。今日僕を呼び出したのはその為だと、タイガーに思い出してもらわなくちゃ。タイガーがリーダーとして振る舞うべき本題。タイガーがリーダーらしく振る舞える本題。

年長者へは、敬意を払っておかなきゃね。

ー尾けられてる。気配は一つ。家を出てから直ぐに、その感覚は俺の肌を灼いた。

心当たり・ナシ。時間的余裕・ややアリ。感情ーかなり不機嫌。イコール、撒くと見せかけて捕まえる。

目線だけ、素早く周囲に走らせる。抜け道の位置と歩行者のバラつき加減。後ろから尾行しているのであろう誰かから見て、俺の背中が最も人混みに隠れるであろうタイミングを見計らい、俺は細い路地裏に曲がった。

少し入った先で家と家との隙間に身を隠し、追って来る筈の人物を待ち受ける。ー来ない。気配がない。

暫くは、気長に息を潜める。……随分な時間が経過した。追って来ねえな、と俺は判断した。となると、俺が勘付いたと知って追うのを止め、路地裏の入口辺りで待ち受けているパターン、かも知れない。

違う道に出る事も考えたが、苛立ちが俺に真つ向勝負を選ばせた。無駄な時間、遣わせやがって。俺は堂々と身を晒し、路地裏から広い通りに戻った。

来るなら早く来やがれ。わざとゆっくり辺りを見回す。だが、肌をぴりつかせた視線はもう感じられなかった。尾行者は、姿を消し

たらしい。

——半端者め。内心で毒づいてから、俺はスタジオに向けて歩き出す。そうして。

歩き慣れた雑踏の中、それは不意に鼻孔を刺した。残された、確かな証拠。

怒りがまず沸き上がり——次いで、呆れがそれを上書きした。思わず溢れる嗤いは、苦笑。

成程、ね。……感情が先に立たない様に、歩きながら俺はシュミレーションしてみる。絶対に、感情的にならない様に。

売られた喧嘩は、買うもんじゃない。——勝つもんだ。

### 三：波乱の幕開け？（後書き）

マツトみたいなの奴は見てると面白いけど、近くには居て欲しくない、分かり過ぎてるルークみたいなのはちょっと怖い、デリクみたいな本心見えない人は信用出来ない。私には、おバカなタイガーが一番安心出来ます。

#### 四：歯車は勝手に廻る

スタジオに入ると、大音量の音楽が流れてきた。プロジェクトで壁に映し出された映像。正面に運んだ椅子に腰掛け、奴はそれに見入っているらしい。

一週間位前に撮り終えたばかりの、俺達の新曲のプロモだ。マネージャーのジエシーだろう、恐らく頼まれて俺達の許可もなく渡しやがったらしい。止めときや良かった。

ちつと舌打ちする、感情的になるなよ、と冷静な俺が喚起してきた。気を引き締めて、振り向いた奴に俺は対峙した。

「いい歌だ。心に染みる」

作詞：タイガー、作曲：俺の、珍しく応援ソング的な歌だ。失ったものをバネに前に進もう、的な。

正直、真逆だと思った。俺なら、失ったものは利用しない。なくしたものは、「これからの為の糧」の立派な教材になんざならない。思い出もしない。記憶にも残す必要はない。そこから学ぶ事など何もある筈がない。

なくしたもんは、なかったもんだ。自分には必要なかっただけのもんだ。こいつみたいに。

無言で立つ俺を、奴は見上げている。まるで俺の考えを見透かす様に。奴は薄く笑った。

「タイガーから俺への決別の歌にも聞こえるけどね」

自覚、あんじゃねえか。無表情を貫く俺をじつと見つめ、奴は続ける。

「作詞は今度もタイガー、か。お前は……『作らない』のか、『作れない』のか、どっちだ？」

その質問が無遠慮に踏み込んだもんかそうじゃないか、なんてのに左右されはしない。野郎の質問に、俺が答える気があるかないかだ。

当然、答える気なんざ微塵もありはしない。答える義理もない。無機質な視線だけは外さない俺を見ながら立ち上がった奴は、ゆっくり俺の前にやって来た。

今度は見下ろされて。それでも態度を変えない俺を暫くじっと見つめ、やがて奴の手がすつと動いた。

俺の目に掛かる長めの前髪を掻き分ける、嫌がりも何も全くの反応を示さない俺に、奴は小さく言葉を落とす。

「……俺を、恨んでるのか？」

わざとに、沈黙を貫いてやる。今迄の俺ならば、とつくにキレてざけんじゃねえとか叫びながら力いっぱい頬を殴りつけていた処だ、多分奴の想像範囲に、ここ迄冷静な俺の反応はなかっただろう。暴力的になつた俺を諫める事で、奴の優位が確定する。からかう様に抑え込め、主導権を手に来るから。だから、俺はぴくりともせず人形のように奴を見上げ続けてやった。

奴の僅かにも傷付いた顔を、俺は期待していた。或いは、諦めや落胆の表情を。例えほんの一瞬にでも。

なのに。

薄く微笑んだ奴にぐいつと腕を掴まれ引つ張られた、と思う間に背中に手が回され、俺の体はがっちり奴に抱き込まれていた。暴れようかと咄嗟に肩に力を込めたが、直ぐに俺はその力を抜いた。

……いいぜ、好きにしる。死体みたいな俺に、気が萎えねえんならな。

嘲りを含んでついそう口にしてしまいそうになつた、緩んだ口元だけは引き締める。無抵抗のぶらぶらした俺の体を一方的に抱く事に、奴がじきに嫌になるだろう事は想像に堅かった。何としても俺の反応を引き出そうとする、奴の意地が反射的にさせただけの行為だろうから。

なのにここでも、奴の忍耐が俺の予想を上回るのだ。ぎゅうと俺を抱いて、それだけで満足なのか奴はいつ迄も腕の力を緩めず、さすがに俺の方がこの事態への苦痛を隠せなくなってきた。

ただでさえ憎らしい野郎に、何でいつ迄もこんな事されて我慢してなきやいけねえんだ。

はあつ、といやみの様に大きく息をついてやった。それで呼び水にでもなつたのか、奴が先に口を開いた。

「懐かしい匂い、感触、温もり……ずっと二次元のお前しか見てなかった。触れたかった……髪も、肌も、……一番に、大好きなんだ……」

俺の頭頂部に顔を埋めての奴の囁き、それは何を意味するのか。がっちり回された腕に、更に力がこもる……

「……ロゼ……俺、さ……」

限界だった。固めた拳を、勢い良く腹に叩き入れてやった。ゲフツとか中身の出そうな声を挙げる奴から身を離す為、拳は今度は奴の左頬に叩き付けた。

抉る様に、左に薙ぐ。誘導どおりに吹っ飛んで行った奴の、気味の悪かった抱擁からやっと解放されて、俺はふうつと息を吐いた。

倒れた奴に、用はない。人の事をこそこそ尾行なんかしやがった文句を言っつてやろうかと思っつていたが、気付いていたと言う事で奴が喜ぶかも知れない可能性を考え、何も言わずに去る選択肢を俺は選んだ。

その方が蔑みや怒りを表し、奴にはダメージになるだろう。振り向きもせずに淡々とこの場を去つてやる方が。

俺はお前を赦す気はない、と知らしめる意味で。

\*タイガーと二人で話し合つての、結論。デリクをマットと接触させない様にする。

マットはタイガー監修の下、雑誌の特集記事を書きたい例の記者さんに連れ回してもらつて、その間に僕がデリクの本心を探る。何がきつかけで今帰つて来たのか、今後どんなポジションでのどんな

展開を期待してるのか。

マットが愛想尽かしていち抜けた、と消えちゃう前に。

「随分ご機嫌斜めね」

料理を盛った皿を並べてくれながら、アンナはそう言った。

「あー……」

奴の名前も口にしたくなくて、俺は説明を投げた。どうせ近い内にもっとむかつく事でも起こって、俺はそれをアンナに喋る事になるだろう。仲良くしたらいいのに、なんてあいつをいい方に誤解してるアンナに、下手を言ってまたそう諫められたりなんかしたら、俺が可哀想だ。

だから、適当に俺は答え代わりの言葉を口にしてみる。

「最近寝不足続きだからさ」

「そう」

料理を全て並べ終えたのかテーブルに腰掛けて、頬杖を付いたアンナはにっこりと笑った。

「じゃあ、今日は安心して早く寝てね」

「寝れるかよ。ってか寝かさねえよ」

冗談でもない俺の言葉に、久し振りに逢った俺の恋人は、失礼にもぶつぶつとか吹き出してくれるのだ。

「はいはい。ご飯にしましょ」

一番の俺の理解者。居るだけで、心地よく満たされる。ルークとも似た明るいこの笑顔に、俺は癒されている。

#### 四：歯車は勝手に廻る（後書き）

いきなりの彼女登場。はい、三角関係成立ですね！

ちなみにルークとタイガーに進展はありません、残念ながら。

ってか、ここで在庫切れで、まだ続きがまとまってないので、次の更新はいつになるやら……。

まあ楽しみにされてる方もいないと思うので、自己満足で適当に載せていきたいと思います。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1107z/>

---

ロゼとチェロキーの恋愛事情

2011年12月7日06時51分発行